

と共通せられたる例證を挙げられ、また今回敵字に通じたる例を示され、其の他^るの音を有する文字と屢々通用せられたるものなるべきを證明せられたるは此の字音について動かす可らざる確證を提供せられたるものにして、もとより余の尊重して一點の疑を容れざる所なりとす。

余は、前回に於ても只だ疑義の存するものを舉げて學士の教を請ひ、敢て自説に亘るを避くるに勉めたりしが、今の論ずる所も亦た略ぼ此の範圍を出でず、これ不才未だ發表すべき程の意見を定め能はざるに因る、希くは漫りに高見を疑がふを咎むるなく、餘暇に乗じて重ねて示教の勞を吝まるゝなくんば幸なり。

終りに臨みて余は學士に請ひて此の際此の語に關する二三の卑見にして未だ研究の半途にあるものを、簡単に敘述して學士の叱正を仰ぐの許諾を得んとす。

一は此の文字は漢字にはあらずして契丹文字ならざるかとの疑なり、今日契丹文字として傳へらるゝものは僅かに數字に止まれども、若し之を女眞文字の構成よりして類推すべくんば「ㄠ」の原字と「ㄌ」の原字とは明らかに後者に存すること華夷譯語中の女眞文字について認むる所の如し、而して此の文字の用いられたる時代はまた余をして此の推察を試ましむる一因なり。

二は若し契丹文字なりとすれば、契丹人が自からの文字を用いて自からの國語を寫すに當り、其の頭音のみを寫して他を省略するが如きは（殊に其の軍を稱ぶ如き場合に）略ぼ有り得可らざる事なる可きを以て、此の字に *te*, *tek*, 其の他之に類する音あることが明らかなりとすれば、其の寫せる原語も *cerig* 等に求めずして、此の字音が